

ちょうどハルピン駅では、ソ連に抑留されて行く日本兵の長い長い貨車が入っていました。

赤紙一枚で召集され、「お国のため」の合言葉で戦ってきた人たちです。武装解除された兵隊さんは、てんでに財布、米など持ち物を皆、投げ捨てていました。

「皆さん、みんな持って行って下さい。元気で内地に帰って下さいよ。自分たちはソ連に連行されて行きます」と口々に絶叫していました。

欲しいものは、誰も同じです。しかし、ぼう然として、見つめたまま、誰も拾いに行く人はいませんでした。

貨車が走り去って、やっと我れに帰り、拾いに行くありさまでした。私たちも、お米を五升（約九リットル）分ありがたく頂き、貨車の後ろ

姿を見送っていました。

ハルピンの工場までの道を八十三人が、主人の先導で出かけることになりました。十二日に牡丹江を出て、何も食わず、飲まずですから、やつとの思いで足を運んでいました。十六日まで、飲まず食わずです。工場の入口で一人の中国人に出会いました。

「シーサン、広畑さん」と声をかけられました。主人は神戸在学中（旧神戸高等商業学校）に一人の留学生と知り合ったそうです。その留学生と二十数年ぶりの再会だったのですが、主人の方はすっかり忘れていました。

「シーサン、神戸でお世話になった〇〇ですよ」と、声をかけられました。あの戦争のさ中、まったく奇跡の出会いでした。

「あのお礼をさせてもらいます」と、その日から八十三人の食糧を、わが身も顧みず、大八車で運んでくれました。

久し振りの豪華な食事でした。

コーリヤン、野菜など、大人は食べられますが、三歳の次女ののどを通りません。私の乳も出なくなりました。次女が「ごはん、ごはん」と欲しがっても、ハルピン駅で頂いたお米も、八十三人の胃袋に入ってしまった、水ばかり飲んで一か月をすごしました。次女は、八月十二日に牡丹江を出てから、飢餓の末に短い生涯を九月十二日に終わりました。

苦しい息の下でも、「悟郎は、悟郎は」と一歳の弟の心配をしながらの永眠でした。主人は、苦しうに「自分の子どもが一番に死んでよかった」とポツリと言っていました。